

文藝の力 時代の力

折 口 信 夫

あゝ言ふ時代別けは、實はおもしろく思はぬのだが、一往は、世間に従うておいてよい。東山だの、桃山だの、と言ふ稱へである。

この所謂東山時代・桃山時代、其に似た心持ちを、十分に持った江戸の元祿時代、此等の時期が、日本の藝術・文學の、大いに興つた時代、と言ふことになつてゐる。此には、異存はない。歴史の上の、著しい事實だからである。だが、此時代が、健全な時代であつたか。此反省は眞に、それ／＼の時代に、同じ難いものゝあることを感じさせる。而も其でゐて、藝術・文學を生育し、飛躍させるのに、まことに恰好な力のあつた時期だつたことは、否む訣にはいかぬ。

時代として、俄分限・成り上り者の時世トキヨ、といふ感の深い此等の時勢に、健康な藝文の營みが

行はれ、美しい花が咲くと思はぬのが、通例、藝術史・文學史の上の、考への型になつて來てゐる。吾々すら、さう思ふのだから、世間大體はまづ、さう言ふ行き方^{イカダ}で、時勢と藝文との關聯を、考へてゐるに違ひないと謂はれよう。

芭蕉や、近松や、西鶴において、題材はどうあらうと、表現力や、藝文に對する意欲、第一に人間の掘み出し方の、實に堂々として居る點を見ると、不健全な時勢が育んだ文學であり、文學者である、とは思はれぬのである。かう言ふ點になると、扱つてゐる題材などは、全く問題ではなくなる。

金閣や銀閣の、立面圖の案出せられた時代、さう言ふ建て物の内部を整へる壁代・調度の類を作り出す異常な俊才も、輩出してゐたのである。其よりも更に、さう言ふ座敷に出て演ぜられた藝能や、其臺本となる文學が、發達してゐたことは、誰しも認める事實であらう。又、さう言ふ藝能の代表者の背後には、幾千萬のみじめらしい藝の^{ウツ}藝士が、古い歴史を負うて、おなじく古き世より持ち傳へた藝能に、喚き、踊り、狂うて居たのであつた。

利休を生み出し、又利休の生み出した「茶」の傳統が、果して後世の吾々の考へ慣れてるやうに、わびしい味ひに歸するものだらうか。一輪の「わびすけ」の、半開の白瑠璃の鐘^{カネ}は、憂鬱とは凡、縁のない快さに咲いてゐるではないか。

利休の生涯を考へても、此わびすけを擴大したら、そこに出て來さうな潤達性が、十二分に物を

言つてゐる。彼の茶も、そこに、性根があつたやうである。

桂離宮などを拜見して歸つた印象の中心には、やはり此潤達性の、大きくひろがつて來てゐるに、心づく。

なる程、遠州好みと言ふものは、こんな傾向に對する評價だつたのだ、と會得するであらう。石州の案出したと傳へる茶席・茶庭を見ても、やはり相當に、豪華過差の感を受ける。

茶の精神の中から、此豪華にして過差なるものを認めることの出來ぬ、人ばかりでもあるまいと思ふが、どうだらう。

茶は茶、日常生活は日常生活といふ風に遊離してゐたのが、利休の生活ではない。又、さう言ふ遊離に、意味を認めて、そこに風雅閑寂があるのだなど考へる人があるとしたら、其は、思ひ直して欲しいと思ふ。

茶は、藝術の生活内容を持つて居て、言語化・造形化せなんだまでのものなのである。そのかはり、演劇の最近い處まで、素質を展開して來て居たのではないかと思ふ。花道に並んで見物したり、羅漢臺に押し合つて、役者の後姿とか、か、う、せ、き、ば、か、りを鑑賞して居た。あゝ言ふ見物が、茶の客に當るやうである。

謂はゞ、見物である筈の客と、少數の陪賓とが、時としては役者になり、立てば頭がつかへ、たひらに坐れば、壁土をおとすと言ふ様な、窮屈な舞臺で演ぜられる演劇だ、と言ふことも出來よ

う。だが此は、決して比喩のつもりで言ふのではない。眞實さうした、僅かな距離よりないことを言はうとするのだ。

江戸の初期から、段々用語を替へて、おなじ用語例に宛てはめようとした語がある。だてといふ語の代表する、一系の語である。

寛潤と言ひ、だてと言ひ、互に一つ用語例の中に、少しづつ、範圍を異におし展げて行かうとした。其がもつと外面式に表現せられたものは、六方・丹前ロツバツの類の語で、所作行動から、性格までも偲ばせるやうになつたのだ。

結局、語自身壓迫せられて、極めて狭い片隅にしか、意義を残さずなつた、その昔の「かぶき」なる語の内容を、色々に言ひ替へたに過ぎぬと言へば、言ひ過ぎだらうか。

新興の氣象激しい時代には、迅速に生育する力がつきとほつて居る。憂への、歡びの藝術も、うつたへる、たのしさの文學も、此力に依つて、十分に伸しあがるのである。憂愁の文學が、陰鬱な時代に出て來るとすれば、其は愚痴文學であり、口説クセガの文學に過ぎぬであらう。

其と今一つ、もつと藝文を育てる原動力になるものは、擁護者である。擁護する者なしに、育つてこそ、眞の藝文ではあつても、擁護するものゝない迫害の時勢には、藝文は萎れいぢけてしま

ふのである。「花」は花でも、温室の花を望む吾々ではない。擁護者の手で、さもしい藝文の幸福を、偷みたいと思はぬ。

だが、さう言ふ擁護によつても、咲くべき花の、大いに咲いて來て居るのが、歴史上の現實であつた。成り上り時代・俄分限の時勢の、東山・桃山・元祿などの時代が、吾々に多くの遺産を残してくれたことは、疑はれぬ事實なのである。此が、文士・藝術家の理想を超越した世間の姿なのであつた。

略歴——明治二十年生。大阪。國學院大學卒。文學博士。慶應大學教授・國學院大學教授。歌名、釋
道空。著書「古代研究」「春のことぶれ」「死者の書」等。



日本出版會承認
イ 250124

國文學叢話

昭和十九年十一月十六日 初版印刷
昭和十九年十一月二十日 初版發行
(共二〇〇部)

(共二〇〇部)

著者

定價 ③ 三圓三十錢
特別行爲稅相當額 二十錢
實價合計三圓五十錢
日本文學報國會

代表者 中村武羅夫

發行者

東京都神田區西神田一ノ五
株式會社 青磁社

右代表者取締役社長

米岡來福

印刷所

東京都神田區三崎町二ノ一
合名新陽堂印刷所
印刷文協東京一〇八五番

東京都神田區西神田一ノ五

發行所

株式會社 青磁社

會員番號一〇三三三番
電話九段(三)二六五番